

# 〈中国知〉とこれからの国際開発

汪 牧耘 (おう まきうん)

東京大学大学院総合文化研究科  
東アジア藝文書院・特任助教

愛知大学国際問題研究所  
日時:2025年12月3日(水) 15:00~16:30

# 汪 牧耘 (Wang Muyun／おう まきうん／まつきー)



詳しく述べ:[https://researchmap.jp/muyun\\_wang](https://researchmap.jp/muyun_wang)

- ・ 中国・貴州省。
- ・ 高校は「理系」(数学・物理学・化学・生物学)
- ・ 学部は、中国(伝統医学・薬学専攻)
- ・ 2016年、法政大学大学院・国際文化研究科・国際文化専攻、修士課程入学  
【修士論文:中国貴州省・石門坎の観光資源化】
- ・ 2018年、東京大学大学院・新領域創成科学研究科・国際協力学専攻、博士課程入学  
【博士論文:中国開発学序説:非西洋社会における学知の特徴と可能性】
- ・ 2022年5月、東京大学東洋文化研究所・特任研究員(東アジア藝文書院(EAA))
- ・ 2024年4月、東京大学教養学部・特任助教(社会連携)
- ・ フィールド:中国(貴州省・雲南省)、日本、ラオス、(タイ、ミャンマー)
- ・ トピック:「開発」をめぐるアジアの知識生産・経験共有、多遍的(pluriversal)開発論等

連絡先: [oumakiunn@gmail.com](mailto:oumakiunn@gmail.com)

- ・ 「開発」 とは何か？
- ・ 知（識）には、「国籍」があるか？

# 本日の流れ

- ・『中国開発学序説』の内容紹介
- ・知識生産者の「自己開発」
- ・これからの国際社会と開発知

- ・『中国開発学序説』の内容紹介

2024年1月30日刊

# 汪牧耘『中国開発学序説——非欧米社会における学知の形成と展開』

法政大学出版局 A5判上製・316頁・定価（本体4,500円+税）



本書は、中国の開発学（development studies）を手がかりに、その設立経緯と言説形成の過程を約30年間にわたって明らかにすることで、非欧米社会における開発の学知が持つ特徴と可能性を試論する。

[試し読み：汪牧耘『中国開発学序説——非欧米社会における学知の形成と展開』より「はじめに」](#)

- 既存の開発学の「欧米中心主義的」 (cf. Bilgen et.al. 2021、Kothari(ed.) 2019[2005]、Ziai 2017、元田 2010)
  - 欧米の植民地支配の歴史の延長線上にある「開発」 (Bernstein 2006、Mitra et al. 2020)
  - 欧米に拠点を持つ学者・大学・研究所・国際機関は言説の主な作り手 (Madrueño and Tezanos 2018)
  - 学術的成果における英語の圧倒的な存在感。 (Ziai 2020 : 245)
- 中国の国際開発援助の規模拡大と独自の開発学の構築
  - 「一带一路」 : 140の国家と31の国際機関が参加し、世界人口の64.8%に影響を及ぼす。 (廣野編 2021:5)
  - 2010年代以降、中国では独自の開発知識を生み出す研究機関が相次いで設立。 (Cheng 2020)
  - 西洋の開発学を改め、独自の開発学を築く。 (徐・李 2020:101)

問題意識：中国の開発学の非欧米社会の知的営みの一例としての示唆的意義

- 中国の「開発学」(development studies)という言説の系譜に着目 (詳細: 第2章)
- 約30年間にみる中国開発学の「言説の反逆」
  - 2010s～: 西洋に挑み、独自性を打ち出す。 (徐・李 2020:101)
  - 1990s: 中国農業大学を基盤に、欧米諸国の開発理念や手法を中国に導入し普及させる。 (李 2019)
- 問い: 中国の開発学は、どのように形成・展開してきたのか
  - 側面①【分野の形成】
  - 側面②【言説の形成】
- 結論: 国境を越えた概念の翻訳、共通体験を含めた実践の経験からつくれ、世界における自国の位置づけの説明に向かっている。

## 序章 問題意識：非欧米社会の開発言説の特徴と可能性

問い合わせ：中国の開発学は、どのように形成・展開してきたのか



### 側面①【分野の形成】

第1章 研究背景：開発言説の研究の系譜と本書の着眼点

第2章 先行研究：中国開発学に影響を与える要素と問い合わせに答えるための課題

第3章 調査対象・手法：課題に取り組むための資料・事例とその収集

第4章 「開発学」という名

第5章 開発学の創設者

第6章 開発学の教育・研究

### 調査結果

→ 3つの言説 → (検証)

第7章 西洋との相違・対立

第8章 「対等性」という自画像

第9章 日本への批判



終章 結論・考察

## ※ 中国の国際開発概観

1950年代 ベトナムや北朝鮮への軍事支援など→対外援助の始まり (張 2012; p. 28)

1964年 「**対外援助 8 原則**」(例: 平等互恵、内政不干渉)

1980年代 「改革・開放」政策の具現化

→ 肥大化しすぎた自国の対外援助を見直し→**国際主義・理想主義の退場** (薛・肖 2011; 馬 2007)

1994年 「大経貿戦略」、中国輸出入銀行の設立 (1995年、優遇借款開始)

2000年 **中国・アフリカ協力フォーラム** (FOCAC) 開催

2011年 「中国の対外援助」白書の公表 (2014年改定)

2013年 習近平総書記が「シルクロード経済ベルト」を言及→「**一带一路**」戦略/構想

2015年 アジアインフラ投資銀行 (AIIB) を設立

2018年 **国家国際開発協力署**(CIDCA)を設立

2020年 「新しい時代の中国国際開発協力」白書の公表

2021年 「小さくて美しい」プロジェクトを対外協力のプライオリティへ

# 先行研究批判：長い時間軸の変化や言説の中身への考察は不在

## 核心となる言葉の概念的歴史

**課題1**：「開発学」という名に、どのような中国語の開発概念の歴史的背景があるか？

## 言説のつくり手とその目的

**課題2**：1990年代から、中国の開発学の創設に携わってきた中国農業大学の研究者は誰であったか。そして、どのように開発学をつくろうとしてきたのか。

## 言説形成に伴う実践をめぐる取捨選択

**課題3**：中国農業大学の研究者が生み出した諸言説は、自国の開発実践の何を取り上げ、何を捨象したか。

調査方法	調査における作業的問い合わせ	調査対象/地	結果
史料分析	中国語「开发/開發」(kai fa)と「发展/發展」(fa zhan)という2つの言葉の意味・概念が、どのように変化してきたのか。 【課題1】	①「中國基本古籍庫」データベース、②19~20世紀に出版された日本及び中国の辞書、新聞・著書『時務報』、『新爾雅』、『人民日報』など	4章
文献調査	中国の開発学はどのように中国で作られてきたか。 【課題2】	核心となる学者（李小雲氏）の①論文や著書、②テレビ、学会、研究フォーラム、新聞での発言等	5章
	中国農業大学の開発学部が設立された後に、開発関連の知識がどのように教えられて、研究されているのか。 【課題2】	①中国農業大学の開発学部のホームページ、②学部のカリキュラム、③学部に所属する研究者の論文、著書や発言、④研究活動のニュースレター、⑤国際的な研究支援事業とその報告書等	6章
	中国人研究者は、中国の独自性を説明するために、どのような開発言説を打ち出しているのか。 【課題2】	①中国農業大学の有名な開発論者の著書、②中国学術文献データベースの開発・発展関連の学術論文	
	中国人研究者は、日本の国際開発研究において独自の開発知識がないと批判しているのはなぜか。 【課題3】	①中国学術文献データベースの日本開発援助関連の学術論文、日本国内の②国際開発に携わる研究者の議論、③国際開発の研究共同体の特徴、④国際開発分野（大来賞）の研究奨励体制。	9章
現地調査	李小雲氏はどのような開発観を持ち、どういう開発実践を行っているか。 【課題2】	【中国・雲南省】シーサンパンナH村。2019年8月16日~8月25日まで。対象：「H実験」という李小雲氏主導の貧困削減事業。	4章
	中国人研究者が指摘している西洋的開発援助の「理念先行型」の問題点は、どのように現地で具現化しており、どう受け入れられているか。 【課題3】	【中国・貴州省】天柱県S村、從江県Z村・X村・D村。2018年8月、2019年の8月と2020年の5月~10月。対象：「中国貴州省における文化遺産・自然遺産の保護と開発プロジェクト」。コミュニティ主導の理論をもとに実施された最初の世銀融資事業。	7章
	「対等性」を重視する「平行経験」という中国人研究者による開発研究の理論化の試みが、現場のどの側面を汲み上げており、何を捨象しているのか。 【課題3】	【ラオス】ルアンパバーン県H村。2020年1月~3月。対象：「東アジアにおける貧困削減の模範的技術援助プロジェクト」（ラオス部分）。中国政府による初の海外における貧困削減援助事業。	8章 12

調査方法	調査における作業的問い合わせ	調査対象/地	結果
史料	 <p>中国語「正史/開拓」(1: 6,000)、「史料/緯度」(1: 1,000)</p>	<p>①「中國基本古籍庫」データベース、②19~20世紀に出版された日本及び中国の辞書、新聞・著書『時務報』、『新爾雅』、『人民日報』など</p>	4章
文献		<p>核心となる学者（李小雲氏）の①論文や著書、②テレビ、学会、研究フォーラム、新聞での発言</p>	5章
		<p>①中国農業大学の開発学部のホームページ、②学部のカリキュラム、③学部に所属する研究者の論文、著書や発言、④研究活動のニュースレター、⑤国際的な研究支援事業とその報告書</p>	6章
		<p>①中国農業大学の有名な開発論者の著書、②中国学術文献データベースの開発・発展関連の学術論文</p>	
		<p>①中国学術文献データベースの日本開発援助関連の学術論文、日本国内の②国際開発に携わる研究者の議論、③国際開発の研究共同体の特徴、④国際開発分野（大来賞）の研究奨励体制。</p>	9章
		<p>【中国・雲南省】シーサンパンナH村。2019年8月16日～8月25日まで。対象：「H実験」という李小雲氏主導の貧困削減事業。</p>	4章
現地	<p>「対等性」を重視する「平行経験」という中国人研究者による開発研究の理論化の試みが、現場のどの側面を汲み上げており、何を捨象しているのか。</p> <p>【課題3】</p>	<p>【中国・貴州省】天柱県S村、從江県Z村・X村・D村。2018年8月、2019年の8月と2020年の5月～10月。対象：「中国貴州省における文化遺産・自然遺産の保護と開発プロジェクト」。コミュニティ主導の理論をもとに実施された最初の世銀融資事業。</p>	7章
		<p>【ラオス】ルアンパバーン県H村。2020年1月～3月。対象：「東アジアにおける貧困削減の模範的技術援助プロジェクト」（ラオス部分）。中国政府による初の海外における貧困削減援助事業。</p>	8章

調査方法	調査における作業的問い合わせ	調査対象/地	結果
史料分析		①「中國基本古籍庫」データベース、②19～20世紀に出版された日本及び中国の辞書、新聞・著書『時務報』、『新爾雅』、『人民日報』など	4章
文献調査		核心となる学者（李小雲氏）の①論文や著書、②テレビ、学会、研究フォーラム、新聞での発言	5章
現地調査		<p>①中国農業大学の開発学部のホームページ、②学部のカリキュラム、③学部に所属する研究者の論文、著書や発言、④研究活動のニュースレター、⑤国際的な研究支援事業とその報告書</p> <p>①中国農業大学の有名な開発論者の著書、②中国学術文献データベースの開発・発展関連の学術論文</p> <p>①中国学術文献データベースの日本開発援助関連の学術論文、日本国内の②国際開発に携わる研究者の議論、③国際開発の研究共同体の特徴、④国際開発分野（大来賞）の研究奨励体制。</p> <p>【中国・雲南省】シーサンパンナH村。2019年8月16日～8月25日まで。対象：「H実験」という李小雲氏主導の貧困削減事業。</p> <p>【中国・貴州省】天柱県S村、從江県Z村・X村・D村。2018年8月、2019年の8月と2020年の5月～10月。対象：「中国貴州省における文化遺産・自然遺産の保護と開発プロジェクト」。コミュニティ主導の理論をもとに実施された最初の世銀融資事業。</p> <p>【ラオス】ルアンパバーン県X村。2020年1月～3月。対象：「東アジアにおける貧困削減の模範的技術援助プロジェクト」（ラオス部分）。中国政府による初の海外における貧困削減援助事業。</p>	<p>6章</p> <p>9章</p> <p>4章</p> <p>7章</p> <p>8章</p>

➤ 「开发」(kai fa)（「開発」の対訳）の意味変化

- ・ 古代の仏教用語：「内発的な力を引き出す」
- ・ 20世紀頃：日本から「開発」を借用→「开发」は「富になるものの発掘・利用」の意味へ
- ・ 現在：自動詞→他動詞。新しいものの創造、価値の創出

➤ 「发展」(fa zhan)（「発展」の対訳）の意味変化

- ・ 20世紀まで：用例がほとんどない
- ・ 20世紀頃：日本から「发展」を借用→「发展」は中華民国の建国とともに普及（畢 2021、陳 2015）
- ・ 現在：「开发」より頻繁に使われる（北京語言学院語言教學研究所編 1986：96,186,198）

まとめ

development studies 訳語：

- ・ 日本：実務的志向の「開発学」
- ・ 中国：単線的・社会進化論的な性格が強い「发展学」

➤ 1990年代以降、開発学の設立の言及 (例：「第三世界開発学」(衛1997a、衛1997b))

➤ 「開発学」の創設者の李小雲 (Li Xiaoyun) 教授

- 80年代末：旧西ドイツの対中援助事業に従事→ドイツやオランダで国際開発学を勉強。
- 外国の援助事業や、参加型開発をはじめとする西洋の開発理念を当時の中国に紹介。
- 90年代末：中国農業大学で中国の初の「開発学部」を設立。
- 「開発学の父」という呼称。



主な著書は28冊、学術論文はのべ120本を超える。論文がダウンロードされた回数は計9万8000回、引用された回数は計4400回以上。



『農村コミュニティ開発計画ガイドブック』(1995)、『誰が農村開発の主体か』(1999)、『参加式開発概説』(2001)、『ジェンダーと開発入門』(2001)、『技術開発と村民の参加』(2003)など。

## ➤ 2000年代、欧米の開発学への疑い

- 背景：中国の国内外の環境変化

- ✓ 高度経済成長を遂げている中国に対する国際的な評価（李 2019、2018）
- ✓ 欧米中心の開発言説の虚構性を指摘するポスト開発論者の研究（葉 2016、2015、2011）

- 中国人研究者のアフリカでの現場体験や国内の開発実践

- ✓ 「西洋的な開発学」が主張してきた平等の理念や相手の主体性を尊重することは、大きな経済格差がある中では偽善に近い。（2020年10月27日、New international Narratives from Chinas Perspective、李小雲氏の発言より）

- 李氏による中国雲南省H村からみる開発観

- ✓ 生活改善を最優先に、社会的・行政的資源を動員
- ✓ 「るべき開発」を求めるのではなく、現実的に「ある・ありうる開発」の議論に重点をおく。



2015年のH村  
(出所：「小雲センター」のスタッフの提供)



2019年のH村  
(出所：2019年8月筆者撮影)

## 中国農業大学における「開発学」関連の機関・組織（2000年代～）

年	機関の交替と設立
2002	農村区域開発学部と人文社会科学学部の合併し、「人文・開発学部」（COHD）に改名
2012	国際開発研究センター（RCID）・国際開発研究ネットワーク（CIDRN）の設立
2017	国際開発とグローバル農業学部（CIDGA）の設立

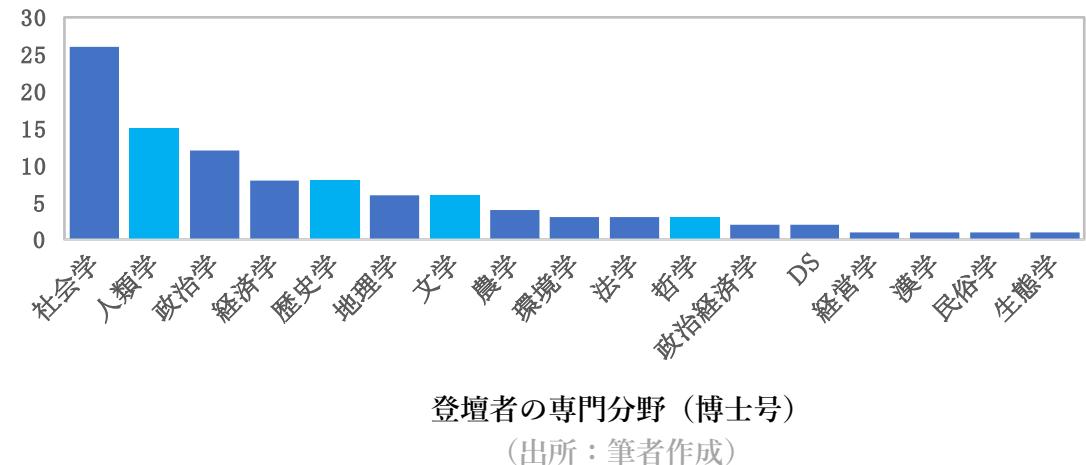
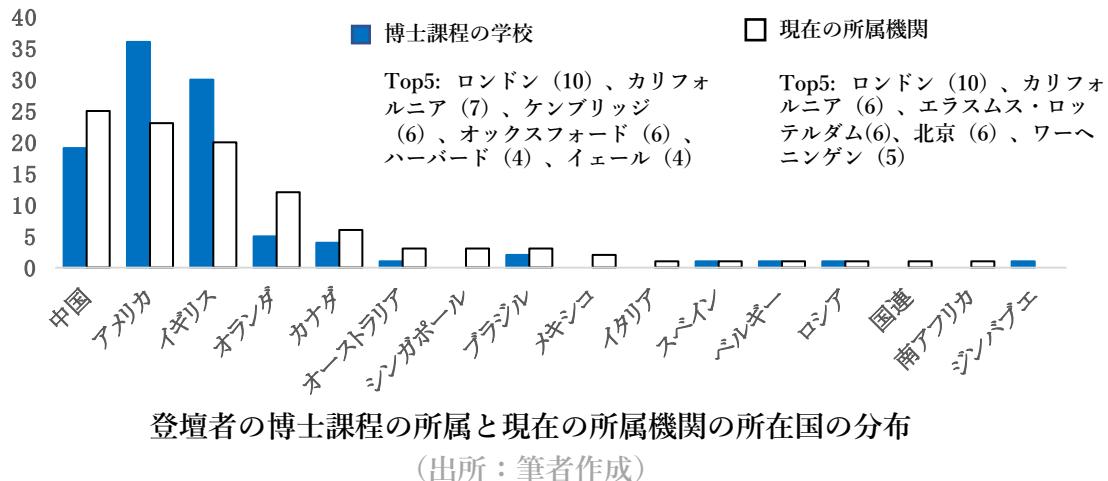
出所：「人文・開発学部」のホームページと李（2019）をもとに筆者作成

➤ 開発関連の教育：人文知・実践を重視する

- 必修科目：国際開発学通論、農村開発計画・管理等、国内外の開発現場の見学
- 選択科目：人類学、人口学、英語、アフリカ文化、西洋政治思想史、メディア学、フランス語、都市社会学、ビデオ編成など、法律倫理学等々（計70科目）
- 国際開発問題と国内開発問題に明確な線引きがない

## ➤ 欧米学者を中心とする国際的交流と中国の主体性探し

- 看板講座：「農政と開発講座」(2011年～)



- ・国際開発とグローバル農業学部(CIDGA)の年次大会



2020年・大会会場

出所:<http://world.people.com.cn/n1/2020/1101/c1002-31914249.html>

- **基調講演**：数名の哲学・思想研究者と「開発学の父」との会談で、「中国・中国化とは何かを議論」→ 世界における中国の位置付け
  - **多様な参加者**：EU、国連、OECD、アフリカ諸国の政府、中国政府、国内外の研究機関・大学等々。（英語セッションは半分以上）

➤ 国家の政策方針：

- ・ 第13次5カ年計画(2016～2020年)」から、自国の開発計画と2030アジェンダを結び付け、SDGsを自国の開発目標達成に活用（北野 2022）
- ・ 2021年9月、「[グローバル開発イニシアティブ](#)」（GDI）：世界各国や国連等に共同参加を呼び掛けてSDGsを推進していく構想。→ 2022年「[グローバル安全保障イニシアティブ](#)」、2023年「[グローバル文明イニシアティブ](#)」、2025年「[グローバルガバナンスイニシアティブ](#)」

➤ 学科建設：

- ・ 「国家安全学」（2020年）や「区域国別学」（2022年）は[一級学科](#)として新設 → 『区域国別学』の研究機関・教科書が急増 ⇔ 開発協力や援助関連の研究・教育は独立できず、他分野に附属
- ・ 2022年、商務部国際貿易経済協力研究院（CAITEC）は、中国農業大学院・復旦大学・对外経済貿易大学・外文局の関連部署と共同で、「[中国と国際発展](#)」シンクタンク連盟を設立（※JASIDのような専門の学会や学術誌なし）



緩やかな関係を保ちつつ、公共財提供者としての大国像を掲げる政策に応じて変化

- 「新開発学」：非西洋的な性格と学術世界の力関係を変える役割 (李 2017)

### 中国の開発援助の独自性をより明確に際立たせるための言説



#### 第7章

言説Ⅰ：中国と西洋の開発をめぐる「現場順応型」と「理念先行型」の対立 (李ら 2017)

#### 第8章

言説Ⅱ：中国の開発援助実践は対等性を重視する「平行経験」の共有が特徴である。 (徐・李 2020)

#### 第9章

言説Ⅲ：日本は西洋の言説を鵜呑みにし、独自の開発知識を生み出せなかった。 (徐・徐 2020: 118)

言説 I：中国と西洋の開発をめぐる「現場順応型」と「理念先行型」の対立（李ら 2017）

➤ 世界銀行と貴州省政府の開発観の違い

世銀

- ・ 観光は貧困削減ではない。
- ・ 観光と文化保護を両立させよう。
- ・ 政府なしの住民組織を作ろう。

貴州省政府

- ・ 貴州にとっての観光は貧困削減だ。
- ・ 両立できた例を見たことがない。
- ・ 運営が不可能になる。

「すべての村人の意見を聞きたいとはいえ、出稼ぎ者も多いので、人を集めるのが難しかった。弱い立場の人たちのエンパワーもそうだね。西洋における住民の参加は中国農村の村人の参加とは違う。世銀は村の共産党支部や村民委員会が行政側だから信頼できないと言って、「弱い者」による新しい組織を作ることを求めたが、有力者を除いてしまうと、プロジェクトの運営自体ができなくなる。」

（貴州省観光局の職員へのインタビューより、2018年8月）

## ➤ 捨象された国際協力の姿：事業の中身を実際に決めていた「交渉」

- ・ 適応：現地の村組織を活かした事業運営・地元職員の世銀に対する高い評価
- ・ 変貌：文化保護と生活改善の相克を超えて

例：プロジェクト対象地のX村

- ・ 事業による49軒の木造の古民家の修復
- ・ 村人による「破壊」：煉瓦造りの家を建て直し
- ・ 村長の葛藤： **火事の恐怖・都市への憧れへの理解**  
**観光地イメージの低下への懸念**

**折衷案**：壁の外側に木材を貼り付け、古民家の雰囲気を維持



X村の古民家  
(2019年9月筆者撮影)

### まとめ

- ・ 理念の相違があるものの、事業は交渉の積み重ねで進められている。
- ・ 開発や違いを捉え直し、互いに学び合う。

言説Ⅱ：中国の開発援助実践は**対等性**を重視する「平行経験」の共有が特徴である。

= **中国人専門家・技術者**を媒体として、中国国内の開発経験をありのまま、対等的に共有する (徐・李 2020)

➤ ラオスの援助現場で共有されているのは**諸経験のハイブリッド**

- ・ 「整村推進」という国内の貧困政策経験
- ・ 中国人専門家自身の国内の農村部での生活・勤務経験
- ・ 事業担当者の広西政府の**被援助経験**など



世銀の経験：

「事業管理オフィス」 (project management office)



ラオス事業の担当部署の前身： 「中国西南扶貧世銀項目管理弁公室」



ラオスの援助：

「ラオ・中連合弁公室」の設立

## ➤ 「経験の対等的な共有」という言説の妥当性

- ・ 貧しい中国農村部の出身・生活・勤務経験→対等的な捉え方
- ・ かつての自分との比較と理解の壁

例：公費での支払いへの不満

私は彼ら（ラオス人職員）にこう伝えたかった。「私も君たちと同じだった。私は（世銀の）事業担当者になったのは30代の頃だ。君たちは国家（中央政府）にいるのに対して、当時の私は県の事業オフィスにいた。当時の私の給料は君たちより高いわけではなかった。しかし我々は世銀に払ってくださいと求めたことがない」。

（中国側職員へのインタビューより）

### まとめ

- ・ 先進国・途上国ドナーを問わず、「他者理解」という共通課題
- ・ 「対等・平行」という常套句→自らの現場体験の単純化

言説III：日本は西洋の言説を鵜呑みにし、独自の開発知識を生み出せなかつた。 (徐・徐 2020: 118)

- 中国における日本国際開発研究：政治的・経済的・外交的側面が中心
- 評価基準の整合性・日本側の視点の欠如
  - 例：青年海外協力隊：目的を批判、効果を肯定 (胡・劉 2015、張 2016)
    - ✓ 日本の政治的・外交的意図を果たす手段。
    - ✓ 援助の政治性を薄める効果：地域の状況に寄り添い、相手国での好感度が高い。
  - 例：「自助努力」：独自性の放棄 vs 独自性の主張の慎重
    - ✓ 中国側：日本は自らの開発経験を理論化し体系化する力が足りず、結局「自助努力」のという独自の理念を放棄し、欧米の理念に服従。 (徐・徐 (2020))
    - ✓ 日本側：「自助努力」という普遍的な考え方を日本独自のものだと強引に訴えることを回避したのである。 (例：下村 (2021))

## ➤ 日本が独自の「開発知識」を主張しなかった理由

- ・ 戦後の反日運動 (北岡 2020、荒木 1997)
- ・ 戦争への反省：軍国主義的な発想の回避 (渡辺 1973、大来 1977)
- ・ 「実践知・文脈・特殊性」を重視する

- ✓ 「国際開発研究 大賞」（1996～）の受賞作品傾向：「経済学的」から「人類学的」へ
- ✓ 「知識」というよりも「経験」の方をよく使っている。 (Sawamura 2002)
- ✓ 日本モデルとは、「モデルを出さない」というモデルである。(佐藤 2021、佐藤 2016: 282)

### まとめ

- ・ 日本の独自の開発知識をつくり出す際の制約と工夫を見逃す。
- ・ 「後発者のコンプレックス」や「経験重視」という日中の共通点を棚上げにする。

問い合わせ：「中国の開発学は、どこから来て、どこに向かっていくのか」

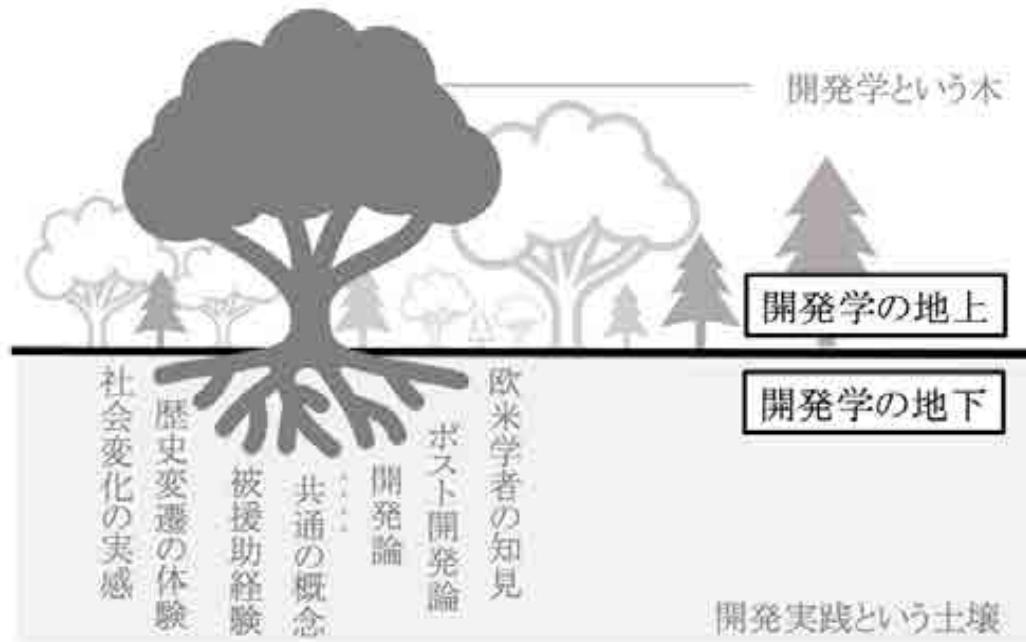


側面① 【分野の創設】 側面② 【言説の形成】

結論：

- 国境を越えた概念、交流や共通体験からつくられて来た。
  - ・ 表面上は欧米や日本を批判し対立している。
  - ・ それを支えている開発実践の総体に、欧米や日本に共通する経験は少なからず存在し、外来の知的蓄積が編み込まれている。
- 世界における自らの位置づけの説明に向かっている。
  - ・ 国際的環境の変化や多分野の研究者が参入している。
  - ・ 中国の開発学を方向づける力が複数ある。
  - ・ 構造的特徴：言説の地上と地下のコントラスト

# 中国の開発学の特徴：言説の地上と地下のコントラスト



- ① 「地下への無関心」
  - 中国の超大国化、南南協力に注目が集めやすい。
- ② 「枝葉を剪定する力」
  - 政府の方針の傾向、イデオロギーの対立、西洋へのコンプレックス、参照軸の画一化。
- ③ 「地下と地上の断絶」
  - 共通体験を噛み碎く余裕がない→西洋への違和感は本質的な対立関係へ

- 
- 知識生産者の「自己開発」

## 「私」への質問

- ・ なぜ日本で、中国の国際開発を研究するのか？
- ・ 私の研究は、中国の開発学なのか、日本の開発学なのか？
- ・ なぜ中国人が、日本の開発学の再構築に一生懸命か？



「開発学」の / 「人」の国籍 (という文脈・属性) が意味すること？

**アイデンティティ**(identity、自己同一性):発達心理学者E・H・エリクソンが1940年代から使用し始めた言葉。

例:テセウスの船(Life of Theseus、プルタルコス、「対比列伝」)

自己アイデンティティ:私は、「『私』は『私』である」ことを確認・確信できるような性質。→無機体・有機体が、変化し、分割可能な「寄せ集め」である一方、持続的同一性を有することは可能か、という問い

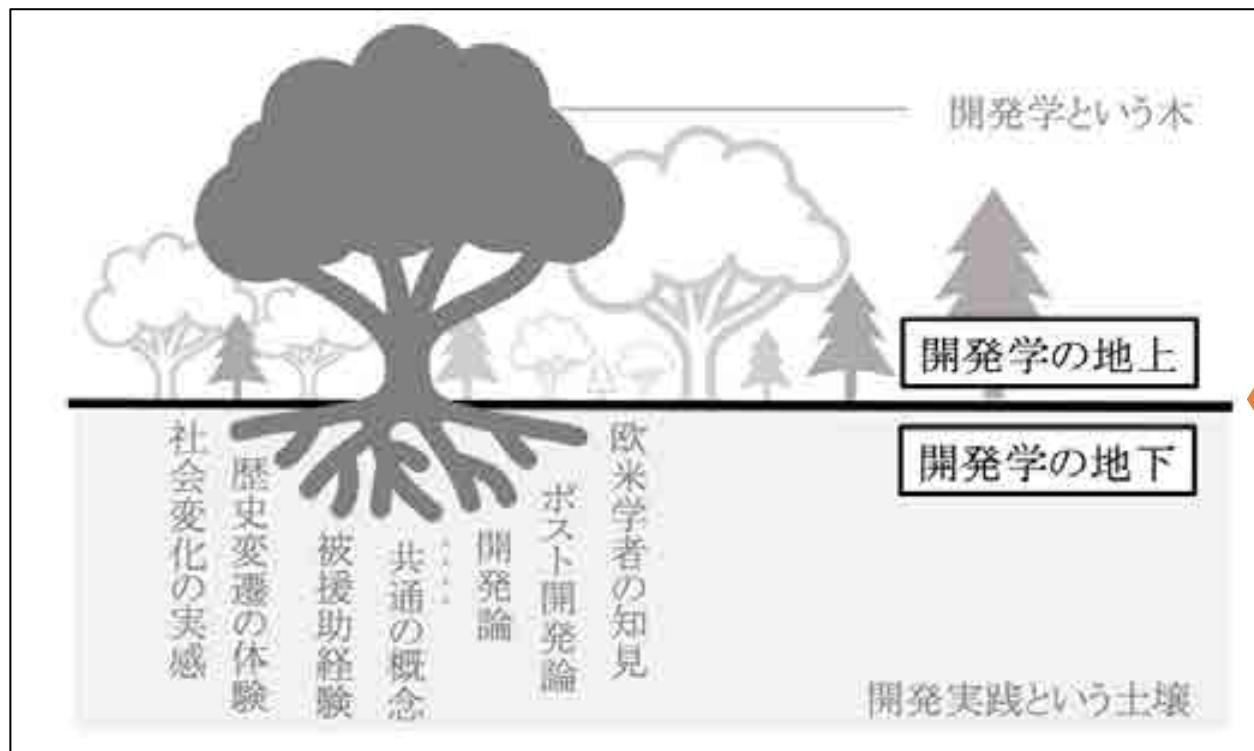


**ポジショナリティ**(positionality):「権力関係が設定されている複数の集団間において、それぞれに帰属する人々の帰属によって付与されている集団的利害の個人への配分様態」(池田 2023、p.2)

※ 簡単にいえば、個人の好き嫌いと関係なく、社会的に投げ込まれた属性や立ち位置のこと。それは多くの場合、非対称的な権力関係を表すものであり、政治性が帯びる。

# 「研究」から捨象できない「私」から、研究を包み返す

- ・「関与」する自分が移り変わる過程の記録としての「知識」
- ・「下」からの $\div$ 翻訳可能性としての普遍性



( 詳細は『中国開発学序説』のおわりに)



特集「国際開発学における日本の境位を探る:越境者の  
オートエスノグラフィーを方法として(こちら)



- ・ これからの国際社会と開発知



40



- ・ **援助の必要性をめぐる言説：国益・安全保障・イデオロギーのレトリックは行政組織肥大化と援助変質につながるのではないか**
- ・ **国際開発援助のエコシステム：单一依存関係を超えた強靭なシステムは、国内外・過去現在・思想実践の相互依存の積み重ねによって構築されるのではないか**
- ・ **学術界・市民社会の役割：行政論理に回収されない「助ける/助けられる/助けになった」という営みを、どう実感・実践レベルで考えるか**

# 開発知

- ・「より良い生」をめぐる信念・解釈・実践の複雑体
- ・捨象されてきた地域・分断してきた分野との紡ぎ直し
- ・構造的普遍性・文脈的偶発性：照らし合わせによる思考資源としての再生

### ＜中国語＞

- 北京語言学院語言教学研究所編、1986、『現代漢語頻率詞典』、北京語言学院出版社。
- 李小雲、2018、「扶貧能讓人致富嗎?」、『中国鄉村発現』第6卷、42-45頁。
- 李小雲、2019、「發展援助的未來：西方模式的困境和中国的新角色」、中信出版社。
- 李小雲・馬洁文・唐麗霞・徐秀麗、2016、「關於中國減貧經驗國際化的討論」、『中國農業大學學報（社會科學版）』第33卷、第5号、18-29頁。
- 李小雲・徐秀麗・齊顧波、2015、「反思發展研究：歷史淵源、理論流派與國際前沿」、『經濟評論』、第1号、152-160頁。
- 李小雲・張悅・劉文勇、2017、「知識和技術的嵌入與遭遇：中國援助實踐敘事」、『西南民族大學學報（人文社科版）』第38卷、第11号、1-8頁。
- 李小雲、2017、「發展知識體系的演化：從『懸置性』到『在場性』」、『人民論壇·學術前沿』第24号、86-94頁。
- 李小雲、2017、「中國援非的歷史經驗與微觀實踐」、『文化縱橫』第2号、88-96頁。
- 李小雲・高明、2018、「現代性與亞文化：深度性貧困少數民族群體消費與貧困的研究」、『四川大學學報（哲學社會科學版）』第3卷、37-46頁。
- 李小雲・齊顧波・徐秀麗編、2005、『發展學專業系列教材：普通發展學』、社會科學文獻出版社。
- 李小雲・齊顧波・徐秀麗編、2012、『發展學專業系列教材：普通發展學（第二版）』、社會科學文獻出版社。
- 李小雲・苑軍軍、2020、「脫離“貧困陷阱”——以西南H村產業扶貧為例」、『華中農業大學學報（社會科學版）』第2号、8-16頁。
- 梁永佳、2019、「超越社會科學的『中西二分』」、『開放時代』第6号、67-80頁。
- 徐加・徐秀麗、2017、「美英日發展援助評估體系及對中國的啟示」、『國際經濟合作』第6号、50-55頁。
- 徐加・徐秀麗、2020、「被架空的援助領導者：日本戰後國際援助的興與衰」、『文化縱橫』第6卷、115-123頁。
- 徐秀麗・李小雲、2020、「發展知識：全球秩序形成與重塑中的隱形線索」、『文化縱橫』第1卷、94-103頁。
- 孫兆霞・毛剛強等、2014、「第四只眼——世界銀行貸款貴州省文化與自然遺產保護和發展項目（中期）『社區參與工作』評估及重點社區基線調查」、社會科學文獻出版社。
- 王芳、2017、「中國經驗促老撾減貧」、『經濟』第16号、88-89頁。
- 汪牧耘、2020b、「減貧經驗輸出的困境和挑戰：對援老項目的中期調查」、『中國農業大學學報』第37卷、第6号、120-130頁。（中國語）
- 汪牧耘、2021c、「日本國際發展知識體系的建構——從傳統到前沿的歷史演變」『日本研究』第3卷、47-57頁。（中國語）
- 韋繼川、2018、「打造中國減貧“海外樣板”」、『廣西日報』、5月30日、001頁。
- 衛建林、1997a、「東西南北和第三世界發展理論（上）」、『高校理論戰線』第8号、38-45頁。
- 衛建林、1997b、「東西南北和第三世界發展理論（下）」、『高校理論戰線』第9号、27-36頁。
- 肖楓・呂瑞勤、1990、「西方發展學述評」、『中國社會科學』、第6号、49-68頁。
- 葉敬忠、2011、「西方發展的西方話語說：兼序『遭遇發展』中譯本」、『中國農業大學學報（社會科學版）』第28卷、第2号、5-15頁。
- 葉敬忠、2015、「發展的故事：幻象的形成與破滅」、社會科學文獻出版社。
- 葉敬忠、2016、「農政與發展當代思潮（第1卷）」、社會科學文獻出版社。
- 葉敬忠・劉曉昀、2000、「現代發展的內涵及其在國際發展項目中的應用」、『農業經濟問題』第11号、39-44頁。

- 荒木光弥、1997、『途上国援助 歴史の証言 1970年代』、国際開発ジャーナル社、82頁。
- 内田慶市・中谷伸生編、2011、『東アジアの言語・文化・芸術』、丸善出版。
- エステバ・G、1996、「開発」、W・ザックス編、三浦清隆他訳『脱「開発」の時代：現代社会を解読するキイワード辞典』、晶文社、17-41頁。
- 江藤名保子、2017、「普遍的価値をめぐる中国の葛藤（分析リポート）」、『アジ研ワールド・トレンド』、第266巻、26-33頁。
- 王平、2012、「中国人研究者による日本のODA研究」、『中国の対外援助』、日本国際問題研究所、81-92頁。
- 王雪萍、2013、「中国における近現代日中関係研究の発展と限界」、『相互探求としての国際日本学研究』、法政大学国際日本学研究所。
- 汪牧耘、2020a、「開発＝开发（カイファー）」の意味変容と概念形成：日中における言葉の借用を中心として」、『国際開発研究』第29巻、第1号、89-99頁。
- 汪牧耘、2021a、「中国開発学試論：先駆的研究者のあゆみからひととく」、『異文化』第22巻、107-129頁。
- 汪牧耘、2021b、「「生き物」としての開発協力：中国貴州省にみる世界銀行と開発事業の現地化」松本悟・佐藤仁編『国際協力と想像力—イメージと「現場」のせめぎ合い』日本評論社、259-283頁。
- 岡田実、2003、「中国におけるODA研究から見るODA観と日中関係」、『国際協力研究』第19巻、第2号、22-30頁。
- 大来佐武郎、1991、「特別寄稿」、『国際開発研究』第1巻、第1号、i - iv頁。小國和子、2003、「村落開発支援は誰のためか—インドネシアの参加型開発協力に見る理論と実践—」、明石書店。
- 畢亜莉、2021、「新漢語「発展」の成立と中国語への受容」、『研究論集』第20巻、135-152頁。
- 賀照田、鈴木将久訳、2014、「中国が世界に深く入りはじめたとき」、青土社。
- 加藤剛、2003、「開発と革命の語られ方—インドネシアの事例から」、『民族学研究』第67巻、第4号、424-449頁。
- 川島真・遠藤貢・高原明生・松田康博編、2020、「中国の外交戦略と世界秩序—理念・政策・現地の視線」、昭和堂。
- 北岡伸一、2020、「夏季職員トップセミナー：今後の日本の国際協力」、『財務省広報志』第56巻、第8号、67頁。
- 佐藤仁、2011、「「持たざる国」の資源論：持続可能な国土をめぐるもう一つの知」、東京大学出版会。
- 佐藤仁、2016、「野蛮から生存の開発論—越境する援助のデザイン」、ミネルヴァ書房。
- 佐藤仁、2021、「開発協力のつくられ方—自立と依存の生態史」、東京大学出版会。
- 佐藤洋、2001、「『維持可能な発展』（サステイナブル・デベロブメント）とは何か」、『経済』、第70号、96-104頁。
- 下村恭民、2020、「日本型開発協力の形成」、東京大学出版会、175、137、198-200、181-184頁。
- 陳力衛、2015、「『優勝劣敗、適者生存』：進化論の中国流布に寄与する日本漢語」、『成城大学経済研究』第210巻、247-271頁。
- 元田結花、2010、「IDSにおける開発観の形成：植民地経営から国際的課題としての開発へ」、遠藤乾編、『グローバル・ガバナンスの歴史と思想』、有斐閣、163-190頁。
- 廣野美和編、2021、「一帯一路は何をもたらしたのか：中国問題と投資のジレンマ」、勁草書房。
- ファーガソン・ジェームズ・石原美奈子・松浦由美子・吉田早悠里訳『反政治機械—レソトにおける「開発」・脱政治化・官僚支配』、水声社。
- 渡辺武、1973、「アジア開銀総裁日記」、日本経済新聞社、1-2頁。
- 山田肖子・大塚麻代・汪牧耘・會田剛史・福林良典・佐藤仁・高田潤一・島田剛、2021d、「特集「国際開発学2.0—新型コロナとニューノーマル」」、『国際開発研究』第30巻、第1号、75-89頁。

- Bernstein, H. 2006. "Studying Development/Development Studies." *African Studies*. Vol. 65. No.1. pp. 4562.
- Bernstein, H. 2010. *Class Dynamics of Agrarian Change* (Vol. 1). Kumarian Press.
- Bilgen, A., Aftab, N., and J. Schöneberg. 2021. "Why Positionalities Matter: Reflections on Power, Hierarchy, and Knowledges in 'Development' Research." *Canadian Journal of Development Studies*. pp. 1-18.
- Cheng, H., and Liu, W. 2021. "Disciplinary Geopolitics and the Rise of International Development Studies in China." *Political Geography*. Vol. 89. 102452.
- Cheng, Han. 2020. *Landscape of Ideas: The Rise of Chinese International Development Thinking*. University of Cambridge. Ph.D. thesis.
- Escobar, A. 1995. *Encountering Development: the Making and Unmaking of the Third World*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- IEG Review Team. 2018. *China-CN-Guizhou Cultural and Natural Heritage* (English). Washington, D.C. : World Bank Group.
- Mitra, Sophie, Michael Palmer, and Vu Vuong. 2020. "Development and Interdisciplinarity: A Citation Analysis." *World Development*. Vol. 135.
- Madrueño, R., and Tezanos, S. 2018. "The Contemporary Development Discourse: Analysing the Influence of Development Studies' Journals." *World Development*. Vol. 109. pp. 334-345.
- Varrall, M. 2013. "Chinese Views on China's Role in International Development Assistance." *Pacific Affairs*. Vol. 86. No. 2. pp. 233-255.
- Mawdsley, Emma. 2019. "South-South Cooperation 3.0? Managing the Consequences of Success in the Decade Ahead." *Oxford Development Studies*. Vol. 47. No. 3. pp. 259-274.
- Kothari, Uma (editor). 2019. *A Radical History of Development Studies*. London: Zed Books.
- Rist Gilbert. 1997. *The History of Development: From Western Origins to Global Faith*. London: Zed Books.
- Sawamura, Nobuhide. 2002. "Local Spirit, Global Knowledge: a Japanese Approach to Knowledge Development in International Cooperation." *Compare: A Journal of Comparative and International Education*. Vol. 32. No. 3. pp. 339.
- Scott, J. 2020[1998]. *Seeing Like a State: How Some Schemes for Improving Humankind Have Failed*. New Haven: Yale University Press.
- The World Bank. 2017. "Implementation Completion and Results Report on a Loan in the Amount of US\$ 60 Million to the People's Republic of China for the CN-GuiZhou Cultural and Natural Heritage Protection and Development." The World Bank.
- The World Bank. 2012. *China - Country partnership strategy for the period FY13-FY16*. The World Bank.
- The World Bank. 2018. *The World Bank Group in China: Facts and Figures*. The World Bank.
- The World Bank. 1998. *World Development Report 1998/1999: Knowledge for development*. The World Bank.
- Ziai, A. 2004. "The Ambivalence of Post-development: Between Reactionary Populism and Radical Democracy." *Third World Quarterly*. Vol. 25. No. 6. pp. 1045-1060.
- Ziai, A. 2013. "The discourse of 'development' and why the concept should be abandoned." *Development in Practice*. Vol. 23. No. 1. pp. 123-136.
- Ziai, A. 2016. *Development discourse and global history. From colonialism to the sustainable development goals*. London: Routledge.
- Ziai, A. 2017. "'I am not a Post-Developmentalist, but...' The influence of Post-Development on development studies." *Third World Quarterly*. Vol. 38. No. 12. pp. 2719-2734.
- Zigon, J. 2008. *Morality: An Anthropological Perspective*. Berg.



ご清聴、誠にありがとうございました。